



(1964年)



プロ野球史上唯一両リーグ首位打者（一九三七～二〇〇八）

江藤慎一

プロ野球でただ一人の両リーグ首位打者。昭和三十四年（一九五九）に中日ドラゴンズに入団した慎一は、昭和三十九年（一九六四）、四十年（一九六五）には、巨人の王貞治の三冠王を阻む首位打者となつた。

昭和四十五年（一九七〇）にはロッテオリオンズ（現千葉ロッテマリーンズ）に移籍し、翌年首位打者となり、史上初めての両リーグ首位打者となつた。その人柄と豪快な打撃でプロ野球ファンをひきつけた慎一だが、その陰では、常に人知れず地道な努力と研究を行つていた。

引退後は、名球会の一員として、青少年年の健全育成や野球の底辺拡大のため、全国で幅広く活動した。

劇的な父との再会！

「野球小僧を歩み始めた少年時代」



←小学校時代の慎一少年（左端）

昭和十二年（一九三七）に江藤慎一は、四人兄弟の長男としてこの世に生を受けました。生まれは福岡県ですが、太平洋戦争による集団疎開のため、住まいを転々としました。父は終戦をシンガポールで迎えたため、家族の疎開地がわかるはずがありません。慎一は、父が生きているだらうか心配をしていました。

昭和二十一年（一九四六）、鹿本郡田底村（現在の鹿本郡植木町田底）に住みはじめた頃に、戦争から帰り疎開地を転々と探し歩いた父が帰ってきました。そこから波乱に満ちた野球人生が始まりました。

慎一は、社会人野球を経験していた父から、キャッチボールや守備練習、バッティングを教えてもらいました。終戦直後で、食糧事情が厳しい時代ではありました。父の両親は、子どもたちを育てるために一生懸命働きました。

慎一も、家計を助けるために、毎朝百五十軒、往復十二キロメートルの新聞配達をやっていました。

中学生になつても続け、プロ野球選手に必要な基礎体力は、このときにできたものでした。

慎一の家族は、昭和二十一年（一九四七）に、さくら湯の道向かいの薬屋（現在の「めがねのホリカワ」付近）で生まれ育つた、母の故郷である山鹿市に引っ越しました。住まいは山鹿市西上町（現在の山鹿税務署付近）です。

昭和二十五年（一九五〇）山鹿中学校に入学した慎一は、本格的に野球を始め

ました。

高校、社会人、プロ野球時代

をござじの方には想像もつかないでしようが、あだ名は「チビ」、

体も細い少年でした。野球部員は学年で十五名程度、日曜日を除いて毎日厳しい練習が続きました。

練習中でも人を和ませることが得意な慎一は、モノマネなどをして、部員を笑わせていました。

ときには上級生から怒られましたが、負けず嫌いの慎一だったため、メキメキと上達し、一年生になるとキャッチャーでレギュラーを獲得しました。

肩が強く、守備でも体を張つて、ボールを後ろにそらしませんでした。そのため、ピッチャーや投げられるようになり、慎一を中心として、強いチームができました。昭和二十七年（一九五二）、三年生の中体連では、鹿本郡市大会で優勝し、県大会に出場しました。本渡市（現在の天草市本渡町）で開催された県大会では、開会式で堂々と選手宣誓を行い、一回戦に臨みましたが、惜しくも一対〇で負けました。

父の仕事の関係で、八月に下益城郡松橋町立西部中学校（現在の松橋中学校）に転校した慎一は、同じく野球部に入り、地区大会で優勝するなど、ここで大活躍しました。このころから、熊本県内で江藤慎一の名前が有名になり、高校からたくさんの入学勧誘が来ました。



←県中体連出場記念写真（3列目左端のユニフォーム）



小学校時代（中央ユニフォーム）

ちょっとコラム

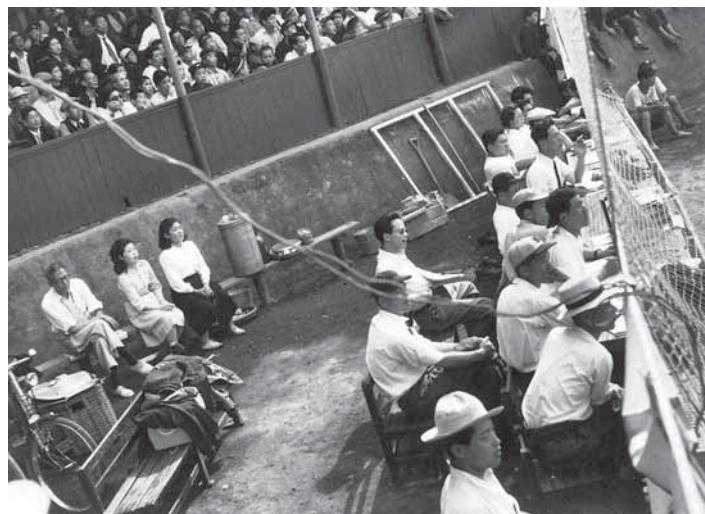
● 昭和二十年代～三十年代の山鹿市の野球史

熊本県内には、熊本市の水前寺、二本木、そして山鹿の三ヵ所しか、公式の野球場はありませんでした。当時の山鹿市は、終戦とともに戦争から帰ってきた若者が、少しずつ野球を始めたのがきっかけで、大変野球が盛んになったようです。

当時の大会社がスポンサーとなり、山鹿小学校グラウンドに外野フェンスを張り、有料の試合が行われ、多くの観客で賑わっていました。市内には硬式の野球部もあり、元旦から試合が行われていたほどです。小学校にも軟式野球部がありました。

試合期間中、小学校の体育の授業はフェンスの中で行われました。

慎一少年は、試合中にアイスキャンディーを売っていたそうです。



山鹿小学校グラウンドでの有料試合の様子（昭和20年代）

夢を追い続ける慎一

～自分に厳しく、他人に優しい高校時代～

昭和二十八年（一九五三）に慎一は、高校野球の伝統校である熊本商業高校に進学しました。体も大きくなり、一八〇センチまで成長しました。

野球部は、先輩後輩の関係が非常に厳しく、毎日がボール拾いでいた。

しかし、プロ野球選手を意識していた慎一は、『他の者には絶対に負けたくない』という気持ちを忘れずに、先輩に必死についていき、黙々と練習に取り組みました。

高校二年生からは、キャッチャーでレギュラーとなり、チームを引っ張っていく存在となりました。夏の全国高校野球熊本県予選でも優勝候補に名前が挙がるほどの実力校でした。

残念ながら、甲子園には一度も行くことはできませんでしたが、元気いっぱいのプレーを観るために、プロ野球のスカウトがたくさん訪れていたことを、他の選手たちが驚いていたそうです。決して恵まれた環境といえませんでしたが、その中で不屈の闘志が生まれて成長したものと思います。



高校時代、チームのまとめ役となった 慎一（最前列右側）

日鉄二瀬に慎一あり

「努力と才能が開花した社会人野球時代」

昭和三十一年（一九五六年）慎一は、プロ野球からの誘いもありましたが、今の体力では通用しないと思い、社会人野球の「日鉄鉱業（株）二瀬鉱業所（以下「日鉄二瀬」という。）」に入社しました。日鉄二瀬は現在の福岡県飯塚市にありました。

炭鉱で栄えた会社で、野球部は昭和三十年（一九五五年）から、

都市対抗野球大会に六年連続出場、産業別対抗野球大会で優勝するなど、八幡製鉄（現新日鉄八幡）野球部と肩を並べる九州の強豪でした。

野球部には寮があり、十八名の選手と一緒に生活していました。

部員全員、午前中は仕事をして、お昼一時から夜七時まで毎日練習していました。『人間の限界まで鍛える。自分に甘えていては長続きしない。』をモットーとする濃人監督は、大会前ともなると百本ノック（ボールを百本とるまで続けること）を毎日行いました。

高校野球で練習の厳しさを知つている選手たちではありませんが、それに耐え切れず、やめていく者もいました。

慎一は、練習が終わっても、黙々とバットを振り続け、二年目でレギュラーの座を獲得しました。

日鉄二瀬野球部は、今もなお破られていない輝かしい記録があります。それは、昭和三十二



←完全試合でホームランを打ち、インタビューを受ける。



←日鉄二瀬時代、みんなで楽しく寮で生活しました。
(左から2番目)

ちょっとコラム

● 昭和二十年代の野球道具

グローブは手作りで、布の中にボロ切れを入れて縫い合わせたものでした。バットも手作りで戦前は自分たちで木を削っていました。スパイクは値段が高く貴重品でした。運動靴で試合をしている子どももいました。中には二人で一足のスパイクを分け合って練習や試合をしている子どももいました。ボールはゴムボールで、今と変わらないそうです。キャッチャーマスクはありません。当然ボールが当たってケガをする子どもがいました。慎一は、キャッチャーをやっていましたが、怖くなかったのでしょうか。

年（一九五七年）の都市対抗野球全国大会において、村上一江藤のバッテリーで対〇の完全試合を成し遂げたことです。その唯一の得点は、慎一のホームランでした。

高校時代から大きく成長した慎一の周りには、プロ野球のスカウトがたくさん集まり、激しい争奪戦を繰り広げました。



社会人野球時代 家族とともに（1957年 夏）（右から3番目）



←中日ドラゴンズに入団した頃

プロ野球選手 「江藤慎一」誕生 ～中日ドラゴンズへ入団～

昭和三十四年（一九五九）、慎一は、多くの誘いの中から中日ドラゴンズへ入団を決めました。

慎一の入団が決まった同じ年に立教大学出身の片岡宏雄も入団しました。

二人ともポジションはキャッチャーです。

そこで慎一は、同じポジションの片岡には負けられないとキャンプでは猛練習を続けました。

その練習の中で、プロのスピードに慎一は慣れていきました。



豪快な打撃フォーム（1963年）



オールスター第3戦でMVP（1965年）

プロ戦では、チームの三冠王というみごとな成績を残しました。

入団一年目、慎一は、全力で試合にのぞみ全試合に出場することができました。

打率二割八分一厘、本塁打十五本、打点八十四、ベストテンの六位の成績でした。

入団六年目の昭和三十九年（一九六四）には、打率三割二分三厘という成績で首位打者になりました。

また、翌年一度目の首位打者のタイトルをものにしました。

その後、慎一は中日の中心選手として躍しました。

また、翌年一度目の首位打者のタイトルをものにしました。

早く試合に出たい
と考えた慎一は、そ
の当時空いていたフ
ーストのポジショ
ンを取ろうと考えま
した。

監督に申し出て、
キャッチャーとファ
ーストの両方のポジ
ションの練習を続け
ました。

その努力もあり、
三月に行われたオー

ちょっとコラム

●約束のホームラン ～お酒が好きだった慎一

慎一は、現役時代よくお酒を飲んでいました。

ある時、慎一に会いに来た知人と飲みながら「明日は、必ずホームランを打つ。」と言いました。

そして、翌日の試合で約束どおりホームランを打ちました。

お酒が好きだった慎一。お酒も野球も豪快な人だったようですね。



→ロッテ時代の慎一（共同通信社提供）



悲願の初優勝

～プロ野球選手でただ一人の両リーグ首位打者～

昭和四十五年（一九七〇）、ロッテオリオンズ（現千葉ロッテマリーンズ）に移籍した慎一は、六月の近鉄戦でみごとにホームランを打ちました。

その年十月、リーグの優勝をめざし、西鉄（現埼玉西武ライオンズ）と戦いました。ピンチヒッターで出た慎一は、必ず逆転の口火を切ると言って打席に立ち、みごとホームランを打ちました。

慎一のホームランで水を得た魚のようにロッテの選手が打ち、五対四で西鉄を下し優勝しました。

プロ入りして十二年目、慎一は、リーグ優勝の味を初めてかみしめました。

昭和四十六年（一九七一）には、三割三分七厘という好成績を残し、プロ野球史上初の両リーグ首位打者獲得の偉業を成し遂げました。

↓選手兼監督時代の慎一（共同通信社提供）



「闘将」江藤慎一 引退へ

～十八年間のプロ野球生活に別れを告げる～

昭和四十七年（一九七二）には、大洋ホエールズ（現横浜ベイスターズ）に移籍しました。

その後、昭和五十年（一九七五）には、太平洋クラブライオンズ（現埼玉西武ライオンズ）に移籍しました。

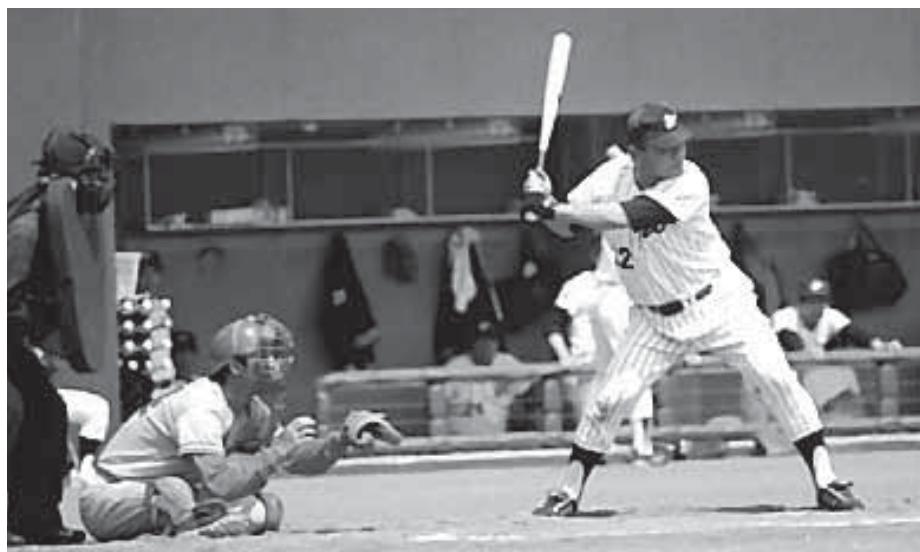
慎一は、選手兼監督として球団再建に力を注ぎ、野性味ある積極的な野球を目指してシーズンを戦いました。九月の近鉄戦では、指名打者としてプロ野球九人目の二千本安打を達成しました。

その年、太平

洋クラブライオンズは、三位となりました。

慎一の闘志ある野球が浸透したことで、みごとAクラス入りを果たしました。

昭和五十一年（一九七六）には、再びロッテに移籍し、その年限りで十八年間のプロ野球生活に別れを告げました。



←往年の打撃復活（山鹿市民球場）

名球会の一員として

～後輩に、子どもたちに、夢をたくす～

現役を引退した慎一は、昭和五十三年（一九七八）に金田正一、長嶋茂雄、王貞治選手らとプロ野球名球会を結成しました。

そして、全国各地で開催される野球教室や講演会などに参加し、野球の普及に尽力しました。さらに野球で得た経験を、社会活動などを通じて青少年の健全な育成に貢献するよう努めました。

昭和六十年（一九八五）には、静岡県伊豆市に「日本野球体育学園・江藤塾」（通称「江藤球塾」）を設立し、現役時代そのままの熱血漢で厳しい練習を行い、数々のプロ野球選手を育てました。

山鹿市の野球にも大きく貢献しています。

中日ドラゴンズ時代の昭和三十九年（一九六四）に、慎一から山鹿市野球協会へ優勝カップが贈られ、第一回江藤杯軟式野球大会が開催されました。

この大会は、現在も続いており、平成二十年（二〇〇八）で第四十五回となります。

また、山鹿市民球場が完成した平成五年（一九九三）には、名球会の一員として子どもたちに野球の面白

さを教えています。

成二十年（二〇〇八）二月二十八日に七十歳の生涯を閉じました。五年間の闘病生活の間は、野球関係者とは会いませんでした。数々の記録と記憶に残る名選手の、ここにも闘将としての誇りがあつたのかもしれません。



家族で久しぶりの里帰り（1993年）



山鹿市民球場での名球会

ちょっとコラム

～『現在の私があるのは日鉄二瀬のおかげである』～

慎一と一緒に日鉄二瀬でプレーをしていたOBの方の言葉です。

「現在も活躍されているのは、日鉄二瀬野球部時代に野球だけでなく、社会人としての厳しさを教えてもらったからだと思います。そして何より野球部寮で寝食をともにし、どんな時でも、ともに喜び、悲しみ、笑い、泣いたチームメイトの結束力があったからです」。

この言葉は、野球を通して養われた精神、人間関係がいかに大事かを教えてくれています。

慎一も同じような気持ちを持って、野球の普及に努めながら子供たちに接していたのではないでしょうか。

年表 History

慎一のプロ通算成績

年 度	球 団	背 番 号	試 合 数	打 数	得 点	安 打	二 塁 打	三 塁 打	本 塁 打	墨 打	打 点	盜 墨	犠 打	犠 飛	四 球	死 球	三 振	併 殺 打	打 率	打 率 順 位
1959	中 日	8	130	495	52	139	19	3	15	209	84	13	0	4	27	3	58	9	.281	6
1960			130	429	48	108	19	2	14	173	61	7	0	4	36	5	49	8	.252	18
1961			130	480	50	128	17	1	20	207	77	4	4	8	46	2	48	10	.267	14
1962			133	493	74	142	13	0	23	224	61	4	1	5	60	3	61	4	.288	4
1963			140	510	72	148	26	0	25	249	70	12	0	5	61	7	50	9	.290	11
1964			140	468	57	151	21	0	21	235	72	5	0	6	47	6	43	13	.323	1
1965			129	443	75	149	22	2	29	262	74	6	0	2	81	3	36	13	.336	1
1966			102	364	51	117	16	1	26	213	91	1	0	2	43	4	30	9	.321	4
1967			132	481	85	133	20	1	34	257	78	6	0	4	64	4	49	9	.277	15
1968			131	487	80	147	29	1	36	286	93	7	0	2	40	6	59	12	.302	4
1969			119	436	51	122	20	2	25	221	84	1	0	6	51	4	52	10	.280	11
1970	ロッテ	12	72	146	21	42	4	0	11	79	31	1	0	3	30	2	23	6	.288	-
1971			114	389	57	131	8	1	25	216	91	3	0	6	49	2	41	15	.337	1
1972	大洋	8	103	276	37	69	9	0	18	132	51	0	0	2	29	2	35	8	.250	-
1973			111	365	30	103	7	0	15	155	44	2	0	1	38	1	33	20	.282	6
1974			111	378	34	110	11	0	16	169	67	3	0	1	24	0	30	13	.291	9
1975	太平洋	12	88	302	28	69	11	1	8	106	36	2	0	2	17	3	31	12	.228	-
1976	ロッテ		69	214	22	49	2	0	6	69	24	1	0	4	18	1	24	6	.229	-
通算成績 (18年)			2,084	7,156	924	2,057	274	15	367	3,462	1,189	78	5	67	761	58	752	186	.287	

タイトル・表彰

●首位打者：3回(1964、1965、1971年)

●最高出塁率：1回(1971年)

●ベストナイン：6回(1961、1963～1966、1968年) ●オールスターゲーム出場：11回(1959、1961～1969、1971年)

●オールスター最優秀選手：2回(1965年第3戦、1968年第1戦)

は、リーグ1位

